

ペルー 悪天候にもかかわらずブドウ栽培面積が微増

agraria.pe 2024年7月3日

(Agraria.pe)ペルーは2023/24年度の出荷シーズンに、6,274万5,726箱(8.2kg/箱)の生食用ブドウを輸出し、前年度(2022/23年度)に報告された7,140万4,349箱と比較して12%の減少、2021/22年度の6,494万8,093箱に比べて3.5%の減少となった。

これは、ペルー生食用ブドウ生産者協会(Provid)によって報告されたもので、この残念な結果は主に悪天候 - 平均を最大4%上回る高温と植物に大きなストレスを与えた激しい雨 - による北部地域での生産量の減少によるものであると同協会は指摘している。

北部地域(ピウラ、ランバイエケ、ラリベルタ、アンカシュの各県)では、2023/24年度の出荷シーズンに2,526万2,464箱の生食用ブドウが出荷され、2022/23年度に出荷された3,600万箱と比較して30%の減少を記録した。ピウラ県は2,014万2,621箱、ランバイエケ県は268万927箱、ラリベルタ県は226万5,787箱、アンカシュ県は17万3,129箱を輸出した。

南部地域(リマ、イカ、アレキパ、モケグアの各県)については、2023/24年度の出荷シーズンに3,748万3,363箱が出荷され、2022/23年度に出荷された3,530万箱と比較して6%増加した。この結果、ペルーのブドウ輸出量の落ち込みは幾分か緩和された。このうち、イカ県は最も増加し、3,505万2,549箱を輸出した。これにアレキパ県(198万6,048箱)、リマ県(44万2,486箱)、モケグア県(2,280箱)の出荷量が加わった。

同協会は、パラカス港(イカ県)の運用開始が、同国南部における生食用ブドウの出荷量増加の重要な要因であることを強調し、「この港湾インフラは、生食用ブドウの出荷シーズンのために改善され、南部地域から特にヨーロッパに向けての大量輸出のための特別な運用が設定された」としている。

市場 市場に関しては、2023/24年度の出荷シーズンには、ペルーの生食用ブドウの輸出量の46%に当たる2,903万5,876箱が輸出された米国が、引き続き最大の輸出先であった。次いで、746万8,238箱で全体の12%を占めたオランダが2位を維持した。

驚きだったのは、中国を第4位に押しやって、メキシコがペルー産ブドウの輸出先第3位につけたことであった。メキシコには538万8,812箱(全体の9%)、中国には481万7,096箱(8%)が輸出された。同協会は、ペルーの生食用ブドウ輸出の歴史の中で、メキシコが中国よりも多くのペルー産ブドウを輸入するのは初めてであると指摘しつつ、これは「メキシコがペルー産ブドウの消費量を増やしたからではなく、中国や他の国への出荷が減ったためである。メキシコには前のシーズンにも同じく530万箱が輸出された」と説明している。

ペルーの輸出量の74%が上記の4カ国に送られ、残りの26%(1,603万5,803箱)は他の輸出先に送られた。ペルーが55の国際市場にブドウを輸出していることは言及するに値する。2023/24年度の大別では、北米が3,671万5,769箱、ヨーロッパが1,315万5,865箱、アジアが816万7,003箱、中米が332万5,379箱、南米が123万9,794箱、オセアニアが13万4,816箱、アフリカが7,200箱であった。

品種群に関しては、輸出されたブドウの55%が種無し白(緑)ブドウ品種(2%減の3,446万8,725箱)、24%が種無し赤ブドウ品種(22%減の1,482万7,380箱)、17%がレッドグローブ品種(25%減の1,059万6,805箱)、4%が種無し黒ブドウ品種(8%減の280万5,831箱)であった。

ブドウの栽培面積は2023/24年度にわずかに増加した 農業検疫局(Senasa)からの情報によると、天候の問題にもかかわらず、2023/24年度出荷シーズンの生食用ブドウの栽培面積は2万2,343ヘクタールで、2022/23年度に報告された2万2,164ヘクタールに比べて0.8%の微増となった。2021/22年度の生食用ブドウの栽培面積は2万1,100ヘクタールであった。

品種群別では、種無し白(緑)ブドウ品種が全栽培面積の54%を占める1万2,065ヘクタール(9%増)で最大であった。これに続くのが種無し赤ブドウ品種で、全体の25%を占めた(面積は6%減)。レッドグローブは16%(同13%減)、種無し黒ブドウ品種は5%(同2%増)であった。

上位5品種は、スイートグローブ22%(同2%増)、レッドグローブ(上記のとおり)、オータムクリスプ14%(同47%増)、シーゼン20(アリソン)7%(同4%増)、スイートセレブレーション5%(同2%減)であった。

執筆者: ホセ・カルロス・レオン・カラスコ